

羅生門

芥川 竜之介



一冊堂青空文庫

羅生門

芥川龍之介

ある日の暮方の事である。一人の下人^{げにん}が、羅生門^{らしやうもん}の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹塗^{にぬり}の剥^はげた、大きな円柱^{まゐはちうじ}に、蟋蟀^{きりぎりす}が一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路^{すざくおおじ}にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠^{いちめがさ}や揉烏帽子^{もみえぼし}が、もう二三人はありそうなものである。それが、この男のほかに誰もいない。

何故かと云うと、この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか饑饉とか云う災がつづいて起った。そこで洛中のさびれ方は一通りではない。旧記によると、仏像や仏具を打碎いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪の料に売っていたと云う事である。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てて顧る者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいには、引取り手のない死人を、この門へ持って来て、棄てて行くと云う習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪るがって、この門の近所へは

足ぶみをしない事になってしまったのである。

その代りまた鴉がどこからか、たくさん集って来た。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鴟尾のまわりを啼きながら、飛びまわっている。ことに門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻をまいたようにはつきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄みに来るのである。——もつとも今日は、刻限が遅いせい、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襖の尻を据え

て、右の頬に出来た、大きな面皰にきびを気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようとする当てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ帰る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微すいびしていた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた」と云うよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれ

ていた」と云う方が、適當である。その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の *Sentimentalisme* に影響した。申さるの刻こく下りからふり出した雨は、いまだに上るけしきがない。そこで、下人は、何をおいても差当り明日あすの暮しをどうにかしようと——云わばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあつと云う音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した薨いづかの先に、重たくうす暗い雲を支えている。

どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んで
いる^{ちがひ}ではない。選んでいれば、築^{つじ}土の下か、道^{みち}ばたの土の上で、
饑^{うえ}死^じをするばかりである。そうして、この門の上へ持って来て、
犬のように棄てられてしまふばかりである。選ばないとすれば――
――下人の考えは、何度も同じ道を^{ていかい}低^ひ徊^{かい}した揚^{あげ}句^くに、やっとこの局
所^{ほうちやく}へ逢^あ着^{ちゃく}した。しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結
局「すれば」であつた。下人は、手段を選ばないという事を肯定
しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その
後に来る可き「盗^{ぬす}人^{びと}になるよりほかに仕方がない」と云う事を、
積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。

下人は、大きな嚏くそめをして、それから、大儀たいぎそうに立上った。夕冷えのする京都は、もう火桶ひおけが欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗にぬりの柱にとまっていた蟋蟀きりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった。

下人は、頸くびをちぢめながら、山吹やまぶきの汗衫かぎみに重ねた、紺あおの襖あおの肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風の患うれえのない、人目にかかる惧おそれのない、一晚楽にねられそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思ったからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗った梯子はしごが眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこ

で、腰にさげた聖柄ひじりづかの太刀たちが鞘走さやばしらないように気をつけながら、藁草履わらぞうりをはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子ようすを窺っていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚の中に、赤く膿うみを持った面皰にきびのある頬である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を括くくっていた。それが、梯子を二三段上って見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこのこと動かしているらしい。これは、その濁った、黄いろい光が、

隅々に蜘蛛くもの巣をかけた天井裏に、揺れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、守宮やもりのように足音をぬすんで、やっと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出来るだけ、平たいらにしながら、頸を出来るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内を覗のぞいて見た。

見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸しがいが、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、

その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるという事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だと云う事実さえ疑われるほど、土を捏ねて造った人形のように、口を開いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にころがっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなっている部分の影を一層暗くしながら、永久に啞の如く黙っていた。

下人は、それらの死骸の腐爛した臭気に思わず、鼻を掩った。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘れてい

た。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまつたからだ。

下人の眼は、その時、はじめてその死骸の中に蹲うずくまっている人間を見た。檜皮色ひわだいろの着物を着た、背の低い、痩やせた、白髪頭しらがあたまの、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片れを持って、その死骸の一つの顔を覗きこむように眺めていた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であらう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時ざんじは呼吸きをするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身とうしんの毛も太る」ように感じたのである。すると老婆は、松の木片

を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱しじみをとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えて行つた。そうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しずつ動いて来た。——いや、この老婆に對すると云つては、語弊ごへいがあるかも知れない。むしろ、あらゆる悪に對する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考えて

いた、うえじに 餓死をするか盗人ぬすびとになるかと云う問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、餓死を選んだ事であろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片きぎれのように、勢いよく燃え上り出していたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。従って、合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云う事が、それだけで既に許すべからざる悪であった。勿論、下人は、さっきまで自分が、盗人になる気でいた事なぞは、とうに忘れていたのである。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上った。そうして聖柄ひじりづかの太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよった。老婆が驚いたのは云うまでもない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩いしゆみにでも弾はじかれたように、飛び上った。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞ふさいで、こう罵ののった。老婆は、それでも下人をつきのけて行こうとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ

合った。しかし勝敗は、はじめからわかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへねじ倒した。丁度、鶏にわとりの脚のような、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘さやを払って、白い鋼はがねの色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわなふるわせて、肩で息を切りながら、眼めだを、眼めだ球まが眶まぶたの外へ出そうになるほど、見開いて、唾しゅのように執拗しゅうねく黙っている。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されていると云う事を意識した。そ

うしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。後に残ったのは、ただ、ある仕事を
して、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがある
ばかりである。そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し声を
柔らげてこう云った。

「己はおれ検非違使けびいしの庁の役人などではない。今し方この門の下を通
りかかった旅の者だ。だからお前になわ縄をかけて、どうしようと云
うような事はない。ただ、今時分この門の上で、何をして居たの
だか、それを己に話しさえすればいいのだ。」

すると、老婆は、見開いていた眼を、一層大きくして、じつと

その下人の顔を見守った。眶まぶたの赤くなった、肉食鳥のような、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、ほとんど、鼻と一つになった唇を、何か物でも噛んでいるように動かした。細い喉で、尖った喉仏のどぼとけの動いているのが見える。その時、その喉から、鴉からすの啼くような声が、喘あえぎ喘ぎ、下人の耳へ伝わって来た。

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、鬢かざりにしようと思ったのじゃ。」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑ぶべつと一しよに、心の中へはいつて来た。すると、その気色けしきが、先方へも通じたのである。

ろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を
持ったなり、墓ひきのつぶやくような声で、口ごもりながら、こんな
事を云った。

「成程な、死人しびとの髪の毛を抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知
れぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいの事を、
されてもいい人間ばかりだぞよ。現在、わしが今、髪を抜いた女
などはな、蛇を四寸しすんばかりずつに切って干したのを、干魚ほしうおだと云
うて、太刀帯たてわきの陣へ売りに往いんだわ。疫病えやみにかかって死ななんだ
ら、今でも売りに往んでいた事である。それもよ、この女の売る
干魚は、味がよいと云うて、太刀帯どもが、欠かさず菜料さいりょうに買っ

ていたそうな。わしは、この女のした事が悪いとは思っていない。せねば、餓死をするのじゃて、仕方がなくした事である。されば、今また、わしのしていた事も悪い事とは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、餓死をするじゃて、仕方がなくする事じゃわいの。じゃて、その仕方がない事を、よく知っていたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるである。」

老婆は、大体こんな意味の事を云った。

下人は、太刀を鞘さやにおさめて、その太刀の柄つかを左の手でおさえながら、冷然として、この話を聞いていた。勿論、右の手では、赤く頬に膿にきびを持った大きな面皰にきびを気にしながら、聞いているので

ある。しかし、これを聞いている中に、下人の心には、ある勇氣が生まれて来た。それは、さつき門の下で、この男には欠けていた勇氣である。そうして、またさつきこの門の上へ上って、この老婆を捕えた時の勇氣とは、全然、反対な方向に動こうとする勇氣である。下人は、饑死をするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。その時のこの男の心もちから云えば、饑死などと云う事は、ほとんど、考える事さえ出来ないほど、意識の外に追い出されていた。

「きつと、そうか。」

老婆の話が完ると、下人は嘲るあざけような声で念を押した。そうし

て、一足前へ出ると、不意に右の手を面皷にきびから離して、老婆の襟えり上がみをつかみながら、噛みつくようにこう云った。

「では、己おれが引剥ひはぎをしようと恨むまいな。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎとった檜皮色ひわだいろの着物をわきにかかえて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、そ

の裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、梯子の口まで、這って行った。そうして、そこから、短い白髪しらがを倒さかさまにして、門の下を覗きこんだ。外には、ただ、黒洞々こくとうとうたる夜があるばかりである。

下人の行方ゆくえは、誰も知らない。

（大正四年九月）

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
